

附属図書館長  
立花 希一

### 自学自習から共同学習へ

「ラッキー、競争相手がひとり減った！」私が中学生の時、同じクラスの生徒が病気で定期考査を欠席することを知った別の生徒が発した言葉である。クラスメートの病気を心配するどころか、他人の不幸を喜ぶ姿に唾然とした。

この言葉は、学校の勉強やその成績が、社会に出た後、さまざまな競争に打ち勝ち、自分が立身出世していくための手段にすぎないという思い込みから出たものであろう。1960年代以降、高度成長を迎えた日本は、熾烈な競争社会になっていた。その風潮が中学生の意識にまで及んでいたのだ。その結果、当時の勉強は、自分のためだけにひとりで行うもの（自学自習）だった。

競争が消滅したわけではないが、1980年代のバブル崩壊以後、高度成長の止まった日本は、従来とは異なる価値の転換が生じている。例えば、「競争社会から共生社会へ」という観念もそのひとつである（バブル崩壊後の日本社会は、悪いことばかりではない）。

このような時代の影響を受けてか、生徒や学生の学習の仕方も変化してきている。友だち同士で、助け合って勉強する光景が、あちこちでよく見受けられる。企業でも、上意下達方式ではなく、グループで、各人が知恵を出し合いながら、商品開発等に取り組むことも当たり前になっている。研究者の間でも共同研究が増加している。

勉強や研究は自学自習から共同学習へと変化し、附属図書館でも1階コモンズやグループ学習室は、共同学習の場として大いに利用されている。半世紀後の今、「他人の不幸を喜ぶ」人間など、少なくとも学習や研究の場には、もはやいないと願いたい。